

丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究と デジタルアーカイブ構築

――進捗過程および成果の報告――

黒沢 文貴・川口 雄一

はじめに

本報告は、「20世紀日本における知識人と教養―丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用―」研究プロジェクトのテーマ2「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」における研究課題別の進捗過程とその成果、および波及的な成果・事業を記したものである。テーマ2の成果は、本書二二三頁以下の「全事業一覧」でテーマ1と共に示したが、一覧という性格上、簡単な記述にとどめたため、ここでより詳しく述べることにする。なお、成果の内容については、インターネット上のバーチャル書庫、草稿類デジタルアーカイブ、その他の刊行物等にも直接当たっていただきたい。

テーマ2は、七名の参加研究者によって構成されているが、その事

業規模のゆえに、実務を中心として丸山眞男文庫スタッフ（若手研究者および大学院生・学部学生）と協働した作業が少なくない。またそれゆえに、事業の進捗にともない、予定にはなかった出版・企画等を幅広く展開することができた。それらのいわば波及的事业をも、担当スタッフの名と共に、本事業の成果として取り上げ、詳しく紹介することとしたい（テーマ2参加研究者および各研究者の研究課題、丸山文庫スタッフの一覧は本書五頁以下を参照）。

テーマ2は、デジタルアーカイブによる資料の画像公開や翻刻・公開といった第一次資料の整備と提供を事業の中心としており、その前提には、これらの資料を今後、多くの研究者や学生、一般の人びとが積極的に活用していくことへの期待がある。本研究プロジェクトの進捗過程と成果についての詳細は、研究者をはじめ一般の人びとがその成果を活用していく上での一助になると考え、ここに報告するもので

ある。

こうした考えから、本報告ではまず、当初の事業計画の概要を示す。その上で、テーマ2の中に位置づけられている各研究課題の進捗過程とその成果を示していくこととする。

I 事業計画の概要

以下では、本研究プロジェクト申請時の「平成24年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業構想調書」（以下「構想調書」）に基づいて、①プロジェクト全体におけるテーマ2の事業の位置づけとその意義、②研究課題別の年次計画、③期待される成果またはその公表計画の順で示していく。なお、「構想調書」で記した字句は、内容を大きく変えない範囲で整理した。

①テーマ2事業概要とその意義

〔本研究プロジェクト全体における位置づけ〕

本学のリベラルアーツ教育と社会科学を中心とする研究基盤の強化、国際的研究拠点を形成することをめざす本事業において、テーマ2「丸山眞男文庫所蔵資料の調査研究とデジタルアーカイブ構築」は、丸山眞男文庫所蔵資料のうち学術的に重要な未公刊草稿資料類の公刊や、同資料を対象とするデジタルアーカイブを構築し一般公開する等、資料の内容を含む情報を広く発信するための拠点形成を主な事業とし

ている。したがって、このテーマ2は、資料整理・公開等の基礎作業が中心であり、そのことを通じて、本事業テーマ1「20世紀知識人の教養と学問―丸山眞男文庫を素材として―」の諸研究、延いて、丸山文庫資料を活用する諸研究に寄与しようとするものである。

〔テーマ2事業の意義〕

丸山の特徴は戦後日本における民主主義の定着を目指して、洋の東西古今に及ぶ豊富な学殖、音楽・文学などの幅広い教養、内外知友との交流から得た知識情報等に裏付けられながら、西欧や中国などと比較しつつ、日本の近代化や思想・政治がもつ独自性を解明しようとした点にある。草稿資料類はその特徴を如実に示す。従って本研究の主な研究分野は、丸山が専攻した日本政治思想史、政治学であるが、同時に、広く日本近代史、宗教社会学、知識社会学、ヨーロッパ政治理論史、東アジア儒教史、日本倫理思想史、近代音楽論、学術交流史などに及ぶ学際的な面をもつ。

また、丸山文庫のデジタルアーカイブが構築され、それが日本と世界に向かって発信されれば、国際的な丸山研究・日本思想史研究の拠点が創出されると考えられる。

〔テーマ2研究課題概要〕

(1) 丸山眞男文庫所蔵資料の整理・調査、デジタル化、公開、それらを中心としたアーカイブの整備

・デジタルアーカイブの構築

・未公刊草稿類資料の公開

・新渡戸稲造の第一次史料を所蔵する諸アーカイブ調査

(2) 丸山文庫所蔵の楽譜類における丸山の書込みの公開とその調査

(3) 丸山眞男に宛てた国内外からの来簡類の調査

(4) 「正統と異端」関連資料の整理・調査と公開

(5) 一九五〇年代後半に丸山眞男が東京大学法学部で行った日本政治思想史講義の原稿の復元と内容調査

② 研究課題別の年次計画、年度別の事業計画

(1) 丸山文庫所蔵資料の調査研究と公開

◇二〇一二年度

・丸山の「古層論」の重要な柱である「倫理意識の古層」論について、文庫所蔵の草稿（複数）を調査し、既刊資料での言及（『丸山眞男講義録』第七冊など）と関連させ、その問題関心の理解に努める。

・南原繁関係資料（丸山による南原著書への書込みなど）を調査し、丸山著作における南原への言及と関連づけて、丸山の南原像を探る。

・文庫所蔵の未公刊草稿資料類について網羅的に調査し、公開に適する資料の選別作業を行い、翻刻を始め、『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』に掲載するとともに、デジタル化の準備を行う。定期的に研究会を開いて各自の進行状況を確認する。

◇二〇一三年度

・パースンズ序文付きの英訳版ウェーバーの『宗教社会学』など、丸山の書きこみがある文庫資料を検討し、「倫理意識の古層」論の理論的枠組みについて理解を深める。

・新渡戸全集と東京女子大学新渡戸稲造記念文庫所蔵資料とに即して新渡戸の思想を検討する。

・文庫所蔵の未公刊草稿資料類のうち、学術的価値の高いものから順次デジタル化に着手する。定期的に研究会を開いて進行状況を確認する。

◇二〇一四年度

・二〇一二・一三年度の作業を前提に、「倫理意識の古層」について補注・解題つきで翻刻発表する。

・他大学所蔵の新渡戸関係資料（とくに北海道大学新渡戸稲造文庫）と東京女子大学新渡戸文庫との関連を調査する。

・前年度同様の翻刻を行い、あわせてデジタルアーカイブ・システムの構築に向けた準備を始める。以上いずれの作業についても、三年間の研究活動を対象として、中間的とりまとめと報告を行う。

◇二〇一五年度

・これまでの調査を踏まえ、新渡戸・南原・丸山の関連を政治思想史の観点から分析し、論文として発表する。

・デジタルアーカイブ・システムを構築し、デジタル化が完了した草稿類のインターネット上での公開を開始する。またこれまでの翻刻資料をまとめた資料集を最終年度に刊行することを目指して、その

準備作業を行う。

◇二〇一六年度

・前年度に得られた思想史研究上の知見から、研究者アーカイブの意義と、それを如何に充実させるかについて考察し、今後の研究に上げる。

・公開可能な草稿類のデジタル化を終えてすべて公開し、丸山文庫のデジタルアーカイブを完成させる。また前年度の準備作業を継続し、丸山文庫所蔵の重要未公開資料を中身とする資料集を公開する。これらの研究成果や資料刊行の意義を明らかにするために国際的なシンポジウムを開催し、内外の学界に発信する。

(2) 丸山文庫所蔵楽譜類とそれへの書込みの調査研究

◇二〇一二・一三・一四年度

楽譜類とそれらへの丸山の書込みに関する基礎的な調査を行う。

◇二〇一五年度

丸山が遺した文庫所蔵の楽譜以外の音楽関係資料（フルトヴェングラーやワグナーの著作等への書込み等）を調査する。

◇二〇一六年度

四年間の調査に基づき、丸山の音楽関係資料に関する包括的な報告書を作成し発表する。

(3) 丸山眞男への国内外の書簡資料（来簡類）の調査

◇二〇一二・一三年度

丸山への国内外からの来簡と丸山が遺した書簡のコピーや控えを調査し整理する。

◇二〇一四年度

丸山と外国人研究者との交流を調査するため海外に出張し、資料蒐集やヒアリングを行う。また発信者と通数を記した来簡類リストの作成に着手する。

◇二〇一五年度

来簡類のリストを完成させるとともに、公表がその時点で可能か否かも含めて、公開の具体的方法について検討する。

◇二〇一六年度

調査結果を、著作権やプライバシー等に関わる問題がない範囲で、丸山を中心とした内外学術交流の広がりを示す論文にまとめる。

(4) 「正統と異端」研究会関連資料の調査と公開

◇二〇一二年度

「正統と異端」研究会関連の資料を網羅的に調査し、共同研究者の草稿類から丸山の草稿を選別し確定する。また「正統と異端」研究会全体の時系列を追った復元を目的として、書誌的な事項を確認し、参加者とそのモチーフ、同時代の知的状況との関連を分析する。

◇二〇一三年度

丸山の草稿類に関する調査を継続し、複数草稿類間の異同を確認す

る。また周辺情報の収集や関係者へのヒアリングを行い、研究会活動の復元作業を継続する。さらに「正統と異端」関係の既刊資料と文庫所蔵の未公開資料との内容の突合せを行う。

◇二〇一四年度

一名が丸山の「正統と異端」草稿類を編集し、校注と補注付けを行う。他の一名が「正統と異端」研究会全体について、活動経過、未刊既刊を含めた報告原稿等の年代順の配列と整理、内容の要約、年表の作成などを行う。

◇二〇一五年度

前年度に取りかかった校注・補注・解題付きの丸山「正統と異端」、及び「正統と異端」研究会資料について、作業が完了したものに付き、公開方法（公開するかデジタル化するか等）を検討する。

◇二〇一六年度

前年度に続き、作業が終った丸山の「正統と異端」草稿、及び「正統と異端」研究会関係資料の公開ないしデジタル化を行って作業を終了する。

(5) 一九五〇年代後半日本政治思想史講義の復元

◇二〇一二年度

一九五〇年代後半における丸山の日本政治思想史講義関係の資料を調査し、資料相互間の時期的・内容的関連を明らかにする。また前後の時期の既刊『講義録』と比較して、この時期の特徴を明らかにする。

する。

◇二〇一三年度

一九五〇年代後半の重要論文「日本の思想」「開国」「忠誠と反逆」などこの時期の講義内容とを比較分析し、当時の丸山における日本思想史像の変化について全体的な理解を得る。またこの年代の講義を聴いた学生の筆記ノートを蒐集し、内容を調査する。

◇二〇一四年度

丸山の遺した第一次資料（自筆ノートや原稿、生協が作成した講義プリントへの丸山の書きこみなど）と学生の講義筆記ノートとをつきあわせて、五〇年代後半における丸山の日本政治思想史講義の復元を目指す。一名が古代以降を内容とした五六・五九年度を、他の一名が戦国末期以後を内容とした五七・五八年度を担当する。

◇二〇一五年度

講義の復元作業を継続し、作業が完成した年度の講義から順次公開する（刊行については東京大学出版会との間で了解がある）。研究成果を生かした校注や解題を付し、この時期の丸山の講義が丸山の学問と思想の形成過程の中でもつ重要な意義を明らかにする。

◇二〇一六年度

前年度に続き、復元が終った年度の講義録を公開し、作業を完了する。

③期待される成果またはその公表計画

丸山文庫所蔵の重要資料に関して順次デジタル化をはかり、デジタルアーカイブ・システムを構築することで国内外の学界に寄与する。

また五年内に翻刻ないし出版を計画している重要資料としては、(1)「正統と異端」関係の自筆草稿類と関連資料類、(2)一九五〇年代後半の東大法学部における日本政治思想史講義（一九五六年度～五九年度の四年分）、(3)「倫理意識の古層」の翻刻（「古層」論には「歴史意識」「政治意識」「倫理意識」の三つがあるが、最後のものは未刊に終わった。文庫には完成度の高い草稿があるので、その翻刻をめざす）。(4)来簡類のうち、著作権などで問題がなく学術的意義の高いものの翻刻。

以上のうち(2)については東大出版会との間で刊行の了解がある。同会は『丸山眞男講義録』全七冊を既刊しており、その続刊となる。上記以外にも、調査の進捗につれて明らかになった重要資料は順次『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』（以下『センター報告』と略記）に掲載し、成果を社会に還元する。研究発表としては、上記(1)(2)(3)に関連するもの以外に、新渡戸・南原・丸山の政治思想的関連、丸山の音楽理解と教養形成との関係、書簡を通して窺える丸山と海外知識人の交流に関する研究の発表を予定している。

Ⅱ 丸山文庫所蔵資料の調査研究と公開

ここでは、実際に進められた事業の内容に即して、①丸山文庫所蔵

草稿資料類の調査・翻刻（主に『センター報告』誌上で示した成果）、②資料集の公開、③草稿資料類のデジタル化およびデジタルアーカイブの構築・公開、④バーチャル書庫の構築・公開、に分けて作業の進捗過程とその成果を記す。

①丸山文庫所蔵草稿資料類の調査・翻刻

丸山文庫所蔵の草稿資料類のうち学術的価値の高い資料の調査と翻刻は、以下のものを取り上げ、作業を進めた。

二〇一二年度・一三年度は、主に二つのテーマに即して調査・翻刻を進めた。福沢諭吉関連資料と日本政治思想史講義関連資料である。

まず、福沢諭吉関連資料の調査に着手した。丸山の福沢に関する資料は、その重要度にたいして、量が多くかつ錯雑しているためである。これまでは、大まかな整理にとどまっていたが、今回精密な調査を進めた。それによって、丸山の講演速記、自筆講演原稿、公開された講演の、これまでに知られていなかった別バージョンが発見された。

この作業には、松沢弘陽氏・山辺春彦氏が当たり、その調査の概要を「丸山眞男文庫所蔵の福沢諭吉に関する草稿・速記稿類の概況」として『センター報告』第九号（二〇一四年三月）に掲載した。また、この調査をふまえ、講演記録「近代的ナショナリストとしての福沢先生」を翻刻し、『センター報告』第九号に掲載した。

また、丸山が東京帝国大学で行った日本政治思想史講義の講義原稿の調査とその復元・翻刻を行った。二〇一二年度は、「戦中」東洋政治

思想史「講義原稿」を翻刻し、『センター報告』第八号（二〇一三年三月）に掲載した。この作業には、宮村治雄氏・山辺氏・金子元氏・川口雄一が当たり、当時の変則的なカリキュラムとそれに基づいて進められた丸山の講義の概要とが示された。

二〇一三年度は、前年度にひきつづき、「一九四七年度・一九四五年度『東洋政治思想史』講義原稿」を翻刻し、『センター報告』第九号に掲載した。この作業は、前年度の作業との関連から、宮村氏・山辺氏が中心となって進め、解題を作成した（両氏の作業を金子氏・川口・播磨崇晃氏がサポートした）。解題では、敗戦直後の混乱期のなか、丸山が行った講義の構成を示したほか、内容的に深く関連した一九四七年度と四五年度との重複部分と重複しない部分を示すことができた。

二〇一三年度以降、丸山文庫所蔵の英文草稿類の調査にも着手し、その成果の一つとして、二〇一四年度に、「Some Aspects of Moral Consciousness in Japan」（倫理意識の「古層」）原稿を翻刻し、『センター報告』第十号（二〇一五年三月）に掲載した。これは、当初の事業計画に掲げていたものである。一連の「古層」論のうち未公表だった「倫理意識の「古層」」がここに明らかとなった（邦訳版が後掲「丸山眞男集 別集」第三巻に収録）。この作業には、山辺氏・金子氏・播磨氏が当たり、調査結果を解題として示した。これによって、当該テーマに関わる丸山文庫所蔵資料の状況が明らかになった。

二〇一五年度は、主に二つの資料の調査・翻刻を行い、いずれも『センター報告』第十一号（二〇一六年三月）に掲載した。その第一は、

丸山が東京大学法学部で行った一九五〇年度の「政治学史」講義の復元・翻刻である。この作業は、渡辺浩氏を中心として進め、川口・播磨氏・山辺氏がサポートした。解題のなかで、渡辺氏は、東京大学法学部における講座「政治学史」の由来と位置づけを明らかにし、日本政治思想史を専門とした丸山が、西洋政治思想史を内容とするこの講座を担当した背景について推定を行っている。

第二に、丸山が李沢厚との対談時に作成したメモを翻刻した。この作業は、平石直昭氏・川口・金子氏が当たり、平石氏が解説を、川口・金子氏が文献解題を作成した。この資料の翻刻の背景には、二〇一四年四月開催の第七回研究会における近藤邦康氏（東京大学名誉教授）の報告がある（詳細は『センター報告』第十号掲載の特別寄稿「一九八九年三月二〇日丸山眞男・李沢厚対談」を参照）。この報告の後、丸山文庫所蔵資料のなかに丸山が当時作成したメモが発見され、近藤氏の報告内容を裏づけると共に、近藤氏の報告に従って、メモの配列を入れ替えて読む必要があることがわかった。この作業は、量として少ないものだが、関係者のヒアリングと資料解釈とが深く関連することを示す重要な成果である。

二〇一六年度は、未公開の英文草稿「Marxism in pre-war and post-war Japan」（資料番号306）を翻刻し、『センター報告』第十二号（二〇一七年三月）に掲載した。この作業には、湯浅成大氏が当たった。この資料は、丸山執筆の英文原稿のみならず、丸山ゆかり夫人筆の口述筆記や他筆の図表などを含む多様なものであり、内容的にも断

片的なものであったが、英文部分の翻訳およびそれと並行した資料調査によって、今後の研究のために貴重な知見が広く提供された。

また、丸山文庫所蔵の庶民大学三島教室関連資料の整理と公開を進めると共に、三島市郷土資料館所蔵の関連資料に当たり、丸山文庫所蔵資料との関連性を調査した。この作業は、川口が担当し、その調査の概要を「庶民大学三島教室関連資料調査報告―その「現在」と第一次史料―」として『センター報告』第十二号に掲載した。

さらに、一九四六年、四八年の長野県における丸山の講演活動等の評伝的事実について詳細が明らかでないものを、これまでに得た情報をもとに、飯田市立中央図書館、県立長野図書館、信濃教育博物館にて調査した。『丸山眞男集 別集』第一巻収録の講演記録「政治嫌悪・無関心と独裁政治」、「民主主義政治と制度」（いずれも一九四八年）の背景事情等を特定することができた。また、臼井吉見文学館（安曇野市）にて、未公表の丸山執筆原稿「安曇野」完結祝賀会における丸山東大教授のメッセージ」の調査・収集を行った。調査結果の概要は、『丸山眞男集』別巻（新訂増補）の正誤表の中で示され、未公表原稿（コピー）は、草稿類デジタルアーカイブにて公開する予定である。

②資料集の公刊

二〇一四年より、丸山眞男生誕一〇〇周年を記念する出版事業を開始した。この事業には大きく二つある。一つは、『丸山眞男集』全一六巻・第四刷および同別巻・新訂増補の刊行、もう一つは、『丸山眞男集

別集』の刊行である（共に岩波書店刊）。

(1)まず、『丸山眞男集』全一六巻・別巻は、丸山生前に企画、刊行され、丸山没後、重刷のたび、編者によって誤記等が修正されてきた。

その後、丸山文庫所蔵資料の整理・調査により、丸山が自著に施した修正の跡などが新たに発見された。このたび刊行された第四刷は、この修正の跡などを反映したものである（二〇一四年三月～一五年六月刊）。また、本書中の各引用文について、丸山文庫所蔵の図書資料類などに当たり、初版を大きく変えない範囲で訂正を行った。このような点で、第四刷として刊行された本書は、実質的には改訂版としての意義をもっている。

また、『丸山眞男集』別巻・新訂増補（二〇一五年七月刊）は、丸山文庫所蔵資料の調査による新たな情報を反映したものである。とくに「年譜」では、第二部として、東京女子大学における丸山眞男文庫の設立過程、丸山文庫を所管する丸山眞男記念比較思想研究センターが進めてきた事業などを記録している。

これらの作業は、初版時より編集作業に携わってきた松沢氏を中心となつて進めた。別巻付録の『月報』に、『丸山眞男集』第四刷と『別巻新訂増補』の完結にあたって」と題して松沢氏が編集過程等の詳しい背景を記している。

(2)東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』は、それまでの丸山文庫所蔵資料の整理・調査によって明らかになった、『丸山集』未収録資料や未公開資料を新たに編集・翻刻したものである。当初の計

画では、「丸山文庫所蔵の重要未公開資料を中身とする資料集」の公開は、前述のように二〇一六年度に行う予定であった。しかし実際には、二〇一三年度の冬頃に企画が立ち上がり、全五巻の刊行予定で、現在第三巻まで刊行している（二〇一四年二月～一五年六月）。第一巻（第三巻の編集には平石氏と黒沢が当たり、第四巻には中田喜万氏と黒沢が、第五巻には河野有理氏と黒沢が当たっているが（全巻の編集協力者として山辺氏・川口）、この編集の背景には、それまでに資料の整理・調査を進めてきた多くの関係者の寄与があることから、東京女子大学丸山眞男文庫の名を冠して刊行した。

以上の事情を、本書の『内容見本』に掲げた「編者のことば」が端的に示している。

「東京女子大学は、丸山眞男の遺族から蔵書や草稿資料類の寄贈をうけ、一九九九年に丸山眞男文庫を設置した。以来、学内外の多くの研究者が協力して、調査と整理に従事してきた。現在では一般にも公開され、所蔵資料を使った研究も始めている。今回公刊する『丸山眞男集 別集』は、この調査過程で発見された著述類から完成度の高いものを選び、編集校訂したものである。『丸山眞男集』未収の作品や、自筆原稿、講演・対談記録等がある。ジャンルを問わず年代順に配列したが、「正統と異端」は長期にわたるため、別に二巻とした。

敗戦から約七〇年、日本は大きな曲がり角に立っている。「原点」の確認が今ほど必要な時はないであろう。本集はその最良の

指南車になると信ずる」

なお、刊行後の調査によつて、『別集』収録作品の基準にかなう資料が新たに発見されていることも付記しておきたい。それらの作品は今後、『センター報告』誌上で翻刻・公開していく。

③草稿資料類のデジタル化およびデジタルアーカイブの構築・公開
本研究プロジェクトの中心課題の一つともいうべき草稿資料類のデジタル化、およびデジタルアーカイブの構築・公開の作業は、以下のように進められた。なお、この作業は、特任研究員を中心とする丸山眞男文庫スタッフが主に進めた。

まず、二〇一二年度は、デジタルアーカイブ構築の事前調査として以下の作業を行った。(1)所蔵資料のデジタル化の作業を計画的に進めていくため、資料の内容を確認した。(2)デジタルアーカイブのシステム構築を委託する業者の選定を見すえ、丸山文庫の資料に適したシステムの検討を行った。(3)デジタルアーカイブでは将来的に、丸山眞男以外の著作者の諸資料をもインターネット上で公開することをめざし、著作権者より公開の許諾を得るための手続きを確認した。

また、音声資料のデジタル化と公開の準備を進めた。これは前年度までの事業を継続したものであるが、とくに二〇一二年度は、以下のカセットテープの寄託・寄贈を受け、順次これらのデジタル化を進めた。(1)石田雄氏より三本、(2)勝股光政氏より四五本、(3)増子信一氏より二本、(4)丸山眞男手帖の会より一本（詳細は、平石・川口「二〇一

二年度 丸山文庫所蔵資料の公開と利用状況』『センター報告』第九号掲載を参照)。なお、内容が個人のプライバシーに及んでいない音声資料は、デジタル化完了後、東京女子大学図書館内で公開している。

二〇一三年度以後、デジタルアーカイブに登録する丸山文庫所蔵草稿資料類の画像を作成するため、ブックスキヤナを用いた同資料類のデジタル化作業を進めた。資料のデジタル化作業には、特任研究員の指示の下、東京女子大学の院生・学部学生のスタッフが主に当たった。この作業によって、二〇一四年一二月、対象となる資料約四〇〇〇点のうち、約三分の一にあたる約一四〇〇点のデジタル化が終了。また二〇一五年一二月、対象となる資料約四八〇〇点のうち、約五分の二にあたる約二〇〇〇点のデジタル化が終了した。二〇一七年一月末日現在、対象となる資料約五〇〇〇点のうち、半分に近い約二三〇〇点のデジタル化が終了した。これらのすべてが東京女子大学図書館内で閲覧可能である。

なお、対象資料が増加している理由は、一つには、関係者による資料の寄贈があげられる。もう一つの理由として、資料の整理・調査が進められたことにより、総量に変化はないが、資料が枝分けされ、点数としては増加したという事情がある。資料点数の大幅な増加の理由としては後者が大きい。

二〇一五年六月一日、「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」(<http://maryamabunko.twcu.ac.jp/archives/>)を公開した。このデジタルアーカイブは、丸山文庫所蔵草稿資料類の検索と、同資料類

の資料画像の閲覧とをインターネット上で可能にするものである。後者については、前述の資料のデジタル化作業と並行して部分公開を開始し、二〇一五年一二月には、丸山眞男作成の資料はほぼすべての画像がデジタルアーカイブ上で閲覧可能となった。また、二〇一六年七月には、著作権継承者の許諾を得て、岡義武作成資料をデジタルアーカイブ上で公開した(デジタルアーカイブ上で公開されていない資料は、東京女子大学図書館内で閲覧可能)。

なお、草稿資料類の整理・調査、デジタル化、公開は、今後も継続していく必要がある。

④バーチャル書庫の構築・公開

バーチャル書庫は、本事業開始時に、その必要性が認識されたものである。草稿資料類については、前述のデジタルアーカイブによって、広く活用可能になるが、図書資料類は、草稿資料類と同様に扱うことができない。そこで図書資料類を対象としたバーチャル書庫をデジタルアーカイブの姉妹サイトとして構築することを考えるに至った。この作業は、佐藤美奈子氏ほか丸山文庫スタッフが中心となり、以下のように進めた。

まず二〇一二年度は、バーチャル書庫に詳しい研谷紀夫氏(関西大学准教授)にヒアリングを行い、今後の見通しを東京女子大学図書館職員と文庫スタッフで協議した。その上で業者にヒアリングを行い、見積書の作成を依頼した。また、二〇一三年度以降は、丸山宅の各部

屋における図書資料類の配列状況を調査・確認し、図書リストを作成した。

二〇一五年三月九日、「丸山眞男文庫バーチャル書庫」(<http://maruyamabunko.twcu.ac.jp/shoko/>)を公開した。そのトップページで、バーチャル書庫構築の背景と意義をつぎのように示した。

「本サイトは、政治学者・丸山眞男が生前、自宅に所蔵していた時の蔵書状況をウェブ上に再現したものです。

丸山の蔵書は、一九九八年九月に東京女子大学に寄贈され、九九年春から図書館階のコーナーに搬入され始めました。その配架に際して「蔵書の配列順もまた丸山の思想を反映する」という考えの下、丸山家に所蔵されていた際の配列を可能な限りいかす方針がとられました。現在でも、東京女子大学丸山眞男文庫に所蔵されている書籍は、一般的な図書館の分類法に基づかず、丸山家における配列を再現した形で書架に並べられています。ただ丸山の書きこみがあつたり、保存状態が悪かつたりした書籍は、管理保存の観点から閉架書庫に収蔵する方針をとりました。このため丸山家にあつたような形での蔵書の全体像を見ることは、現在では不可能になってしまいました。

このバーチャル書庫は、丸山の思想が反映されたものとの書架の配列を、より多くの方々にご覧いただくために作られたものです」バーチャル書庫は、それ自体が新しい研究リソースである。実際、バーチャル書庫公開後、思想史研究者だけでなく、システムエンジニア

ア等の人びとからも多くの反響が寄せられている。丸山研究、思想史研究はもとより、広く人文社会科学等においてバーチャル書庫が多様な方法で活用されることを期待している。

バーチャル書庫および前述の草稿類デジタルアーカイブの仕様等の詳細は、丸山眞男文庫スタッフ「丸山眞男文庫バーチャル書庫と草稿類デジタルアーカイブの構築と公開―丸山眞男研究プロジェクトテーマ2成果報告―」（『センター報告』第十一号（二〇一六年三月）掲載。本書二二一頁以下）を参照されたい。なお、これらの構築作業にあたり、堀内健司氏、川口ほか丸山文庫スタッフは、アーカイブとして丸山文庫を整備していくため、日本各地のアーカイブを訪ね、以下の研究機関、図書館、資料館にて調査を行った（なお新渡戸アーカイブについては別項を設ける）。

- ・愛媛県生涯学習センター愛媛人物博物館（愛媛県）
- ・水俣市立図書館（熊本県）
- ・水俣市立蘇峰記念館（熊本県）
- ・同志社大学今出川図書館徳富文庫（京都府）
- ・吉野作造記念館（宮城県）
- ・東北大学史料館（村岡典嗣文書／宮城県）
- ・秋田県立博物館（秋田県）
- ・三浦梅園資料館（大分県）
- ・大分県立先哲史料館（大分県）

- ・ 日出町立萬里図書館（大分県）
- ・ 中津市立小幡記念図書館（大分県）
- ・ 廣瀬資料館（大分県）
- ・ 筑西市立関本公民館図書室塙文庫（茨城県）
- ・ 茨城県立歴史館（茨城県）
- ・ 南方熊楠記念館（和歌山県）
- ・ 飯田市美術博物館（長野県）
- ・ 津山洋学資料館（岡山県）
- ・ 琉球大学附属図書館（矢内原忠雄文庫／沖縄県）

最後に、バーチャル書庫・草稿類デジタルアーカイブの公開に象徴される研究基盤の形成に伴い、この研究基盤を国際的なものとしていくため、関連ホームページの作成およびその翻訳を以下のように進めた。

二〇一二年三月二八日、丸山眞男研究プロジェクトのHPを公開したのを始めとして (<http://office.twcu.ac.jp/univ/research/project/maruyama-project/>) 二〇一六年度には、丸山眞男記念比較思想研究センター関連ホームページの外国語訳文（英語／中国語）を作成・公開した。具体的には以下の通りである。

- (1) 「丸山眞男記念比較思想研究センター」ホームページ：「概要」
- (2) 「丸山眞男文庫」ホームページ：「概要」「所蔵案内及び検索方法」
- (3) 「丸山眞男研究プロジェクト」ホームページ：「概要」「メンバー」

- (4) 「丸山眞男文庫バーチャル書庫」：トップページ
- (5) 「丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ」：「このアーカイブについて」

これらのうち、(1)～(3)は二〇一七年三月に、(4)(5)は二〇一六年六月に作業を完了し、公開している。

Ⅲ 丸山文庫所蔵楽譜類とそれへの書込みの調査研究

丸山文庫には、多くの楽譜類が所蔵されており、そのうち丸山の書込みのあるものは、四三四冊に及ぶ。本事業では、この書込み部分の公開（それに伴うデジタル化）とその内容を中心として調査・研究を進めた。進捗過程と成果は以下の通りである。

二〇一二年度は、土合文夫「丸山文庫楽譜蔵書の調査をひとまず終えて」（『センター報告』第七号（二〇一二年三月）掲載）の調査報告をもとに楽譜の書込み状況を確認し、公開方法の検討を行った。二〇一三年度以降、丸山文庫所蔵の楽譜類、とくに丸山自身の書込みがあるものを中心として調査と研究を進めた。また、丸山の書込みのあるページのデジタル化作業に着手した。二〇一四年度には、丸山の書込みのある楽譜四三四冊のデジタル化作業が完了し、すべて東京女子大学図書館にて閲覧可能となった。

二〇一四年十一月、丸山における音楽の素養についての試論として、土合氏が第八回研究会で「丸山眞男と文人たちとの交流」と題する報

告を行った。二〇一六年三月、この報告に加筆・修正を施した論稿が『センター報告』第十一号に掲載された。

また、二〇一五年七月、丸山の楽譜への書込みを通じて彼の思想史方法論の研究を進めている奥波一秀氏（日本女子大学准教授）を招き、第一一回研究会で「丸山眞男と音楽にまつわるいくつかの謎」と題して報告していただいた。丸山における「執拗低音」という方法と神話解釈との関係の問題など、有益な議論が交わされた。なお、氏には、「〈知性の愚者〉であること」「『現代思想』二〇一四年八月臨時増刊号」、「丸山眞男における音楽と啓蒙の問題」（『図書』二〇一五年一月号）など、この問題に関する論稿が多数ある。

以上のように、丸山文庫所蔵楽譜類に関する事業は、すでに広く学内外の研究者によって活用され、その成果が示されている。今後、さらに多くの研究者によって、丸山における音楽の意味が深められていくことが期待される。

IV 丸山眞男への国内外の書簡資料（来簡類）の調査

丸山文庫所蔵の丸山眞男への来簡は、丸山家保管時に基礎的な整理がなされたうえで文庫に移管されたものと、図書・雑誌、ノート・草稿類、寄贈抜刷などを整理するなかで発見されたものとの二種が存在する。これらの資料の将来的な公開に向けた整理・調査について、以下のように作業を進めた。

①書簡リストの作成

二〇一二年度は、これらの資料の整理のため、どのような作業が必要であり、どの程度の時間を要するかに関する、予備調査を行った。なかでも発信者中、とくに量が多い人物の書簡を選び、すべてを読んで発信日付を特定した。二〇一三年度以降は、この予備調査をもとに、リストの作成を進めた。発信者が約三四〇〇名にのぼることを確認した上で、発信者名（含、フリガナ）別の書簡リストを作成した。今後は、発信者別の通数や各書簡の発信日などの特定、それらの情報のリスト化が課題である。

②学術的価値の高い書簡の翻刻・公刊

二〇一二年度の予備調査によって、学術的に重要度の高いものがあることがわかった。とくに書簡の内容は、発信者と丸山を中心とする一部の関係者にしか知られていない貴重な情報が多く含まれている。そこで、学術的に重要度の高いものは、優先的に調査の対象とし、活字化という方法によって公開することとした。

この方針に沿って、二〇一三年度、竹田行之氏（元岩波書店編集者）の協力を仰ぎ、吉野源三郎が丸山に宛てた書簡三六点を翻刻、『センター報告』第九号に掲載した（その後、丸山彰氏から新たに寄贈された吉野書簡四点を『センター報告』第十二号に翻刻、掲載）。また、二〇一六年度、鷺巣力氏（元平凡社編集者、立命館大学加藤周一現代思想研究センター長）の協力を仰ぎ、加藤周一が丸山に宛てた書簡二六

点を翻刻、『センター報告』第十二号に掲載した。どちらの書簡も、竹田氏、鷺巣氏によって背景の詳細が示され、丸山研究のみならず、広く思想史研究にとっても重要な内容を一般に提供することができた。

このほかにも、竹内好や南原繁が丸山に宛てたものなど重要な書簡を数多く確認することができたため、今後これらの資料の調査と翻刻を進めていく予定である。

V 「正統と異端」 研究会関連資料の調査と公開

「正統と異端」は、一九五〇年代後半以降、晩年まで丸山が取り組みつづけた研究テーマである。筑摩書房の企画『近代日本思想史講座』の第二巻として、丸山を中心に出版したこの研究は、しかし未刊に終わった。丸山は、共同執筆予定の研究者たちと研究会を開催し、そのなかで自身の「正統と異端」の研究を進めていった。断続的に進められた研究会のなかでも、本研究プロジェクトではとくに一九八〇年代に作成された研究会資料に着目し、調査・研究を進めた。その進捗過程と成果は以下の通りである。

二〇一二年度は、主として、(1)丸山と共同で研究を行った石田雄氏（東京大学名誉教授）ほか関係者のヒアリング、(2)テープ起こし原稿・ゲラ類の整理を進めた。(1)の活動の副産物として、二〇一二一年九月、石田氏より研究会のレジュメを含む関係資料一式が寄託された。これらの作業に基づく研究成果は、河野有理氏が「正統と異端」研究会を

めぐって」と題して、二〇一三年三月の公開研究会で報告を行った。

また、二〇一三年三月、一九八〇年代の研究会担当編集者であった勝股光政氏より研究会の録音テープ四五本が寄贈され、二〇一三年度は、録音テープのデジタル化と並行して、その内容調査を進めた。二〇一二年度に調査した丸山文庫所蔵のテープ起こし原稿と録音テープとを突合せるとき、テープ起こし原稿には、テープ起こしをした筑摩書房編集者の手が相応に加えられており、丸山の発言を必ずしも忠実に再現したものではないことがわかった。テープ起こし原稿への丸山の加筆・修正を経た完成原稿が作成されなかったことから、録音テープの内容は、丸山が自身の言葉で「正統と異端」についてまとめた考えを述べた最後の資料ということになる。

二〇一三年度、「正統と異端」研究会の資料を収録する東京女子大学丸山眞男文庫編『丸山眞男集 別集』第四巻・第五巻の企画が立ち上がった。この企画をうけ、中田氏および河野氏は、打合せを重ね、上記の録音テープを新たに文字起こしし、それを元に編集していくことを決定した。なお、第四巻では近世をテーマとした研究会の記録を、第五巻では近代をテーマとした記録をそれぞれ収録することとした。

二〇一三年度以降、「正統と異端」研究会の録音テープの文字起こし作業を進めたが、いくつかの点で作業が難航した。第一に、研究会における丸山の報告や発言は、一般参加者を聴き手とした講演等と異なり、それまで長年、研究を共にしてきた石田氏を中心とした小人数の場でのものがほとんどであったため、聴き取りづらい箇所が少なから

ず存在したことである。第二に、内容が高度に学術的で専門性が高いことから、テープ起こし原稿を正確に仕上げていくためには、数名の専門家が時間を要して校訂する必要があったということである。このような事情に加え、テープの分量が非常に多かったことから、文字起こし作業には相当の時間を要することになった。

なお、これらの作業と並行して、丸山文庫所蔵の「正統と異端」研究会関連資料の整理・調査をさらに進め、二〇一五年一月には、デジタルアーカイブ上に丸山自筆の原稿のほぼすべてを公開することができた。これらの自筆原稿によって、「正統と異端」研究会の録音テープのなかで聴き取りづらい箇所や高度に専門的な発言を、ある程度まで明確にすることができた。

こうした作業の成果として、『丸山眞男集 別集』第四巻・第五巻の刊行に結果的に先立つこととなったが、紙幅の関係で『別集』には収録できなかった（本来編者注として『別集』に付す予定であった）関連する自筆原稿の翻刻を、『センター報告』第十一号・第十二号に掲載した。この作業には、黒沢・山辺氏・川口が当たった。

以上、テープ起こし、内容の確認、関連資料の整理等に予想外の時間がとられたため、『丸山眞男集 別集』第四巻・第五巻は、現在なお編集作業中である。刊行予定日を超過しているが、しかしそれらの作業によって、『別集』第四巻・第五巻は、テキストとして信頼の置ける「正統と異端」研究会の記録になり得るものと自負している（第四巻は二〇一七年内に、第五巻はそれに引き続き刊行の予定である）。

VI 一九五〇年代後半日本政治思想史講義の復元

一九五〇年代後半に行った丸山の日本政治思想史講義がもつ意義については、二〇一二年一月開催の「丸山文庫所蔵の自筆講義ノート（五〇年代後半）について」と題する平石氏の研究会報告で示されている（本書二四八頁）。いわゆる「古層」論という思想史的方法に通ずる前段階として、講義においてはじめて古代を扱ったのは一九五九年度と回想していた丸山であったが、実際は、五六年度であることが丸山文庫所蔵資料からわかる。この一九五〇年代後半の丸山の学問を跡づける五六年度～五九年度の講義録を公開していくことが、本研究の課題である。その作業は以下に進めた。

二〇一二年度は、(1)一九五〇年代後半に丸山が東京大学法学部で行った日本政治思想史講義を復元するため、資料の発掘と収集活動を行った。近藤邦康氏から、一九五六・五七両年度の受講ノートを拝借した。(2)丸山文庫所蔵の一九五〇年代後半の講義ノート（丸山自筆）の調査を進めた。

二〇一三年度以降は、一九五六～五九年度の日本政治思想史講義の復元作業を進めた。当初より、一九五六年度と五九年度の講義、他方、五七年度と五八年度の講義が内容的に深く関連していることは知られていたが、ここまでの作業によって、五六年度と五九年度、五七年度と五八年度の重複している部分が徐々に明らかになった。

編集作業の過程では、既刊『丸山眞男講義録』の編集方針に従い、もともと信頼の置ける丸山自筆の原稿を主として用いることとし、丸山文庫所蔵資料のなかから該当する原稿を探索した。探索が必要であったのは、各年度の講義原稿がそれ自体としてまとまった形で保存されていなかったためである。一九五六年度講義の作業の概要については、二〇一五年一〇月開催の第一二回研究会で「丸山眞男・一九五六年度講義の概要」と題して平石氏が報告を行った（本書二五九頁）。以上の作業を経て、一九五六年度・五九年度の講義、五七年度・五八年度の講義の調査と編集を終え、二〇一七年三月に東京大学出版会への入稿が完了した。前者は平石氏が、後者は宮村氏が担当し、両氏を山辺氏がサポートした。この講義録は、『丸山眞男講義録』の続刊として東京大学出版会より二〇一七年九月刊行予定である。

なお前述の通り、本研究プロジェクト期間中、上記の講義のほか、戦中および敗戦直後の日本政治思想史講義、一九五〇年度「政治学史」の講義原稿も翻刻され、丸山の行った東大法学部での講義についてはかなりの部分が明らかとなったことになる。

Ⅶ 新渡戸稲造関連資料アーカイブの調査

本調査の目的は、プロジェクト全体の研究テーマにも関わる新渡戸稲造の教養観やそれをめぐる思想の研究を進めるにあたって、東京女子大学所蔵の新渡戸稲造記念文庫をはじめとする幾つかのアーカイブ

に所蔵された新渡戸関連資料を、アーカイブ間の関連性を保ちながらどのように利用していくことが可能か、またその前提として、他機関所蔵の新渡戸関連資料の内容はどのようなものか、新渡戸を軸としたこれら諸機関のアーカイブ相互の連携をどのように深めていけるかといったことを調査することである。そのことが延いて、丸山文庫を中心とした事業や研究にとって極めて有益と考えている。

なお、この調査に先立って、本研究プロジェクト参加研究者の間で共有されていた情報に従えば、新渡戸関連資料を所蔵する代表的な機関として、本学の新渡戸稲造記念文庫のほかに、北海道大学附属図書館の「新渡戸稲造文庫」(<http://www.lib.hokudai.ac.jp/collections/personal/inazo-niobe/>)、東京大学経済学図書館・経済学部資料室の「新渡戸図書」(http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/?page_id=2094)が挙げられていた。なお、岩手県盛岡市立先人記念館などにも新渡戸関連の資料が所蔵されているが、本学所蔵資料の主なもの「新渡戸図書」(新渡戸稲造手沢本の通称)であることから、上記のアーカイブの重要性がとくに認識されていた(その後の調査によってこれに新渡戸記念館が加わった——後述)。

東京女子大学、北海道大学、東京大学の三か所に分かれている「新渡戸図書」は概して以下のような特色によって区別されるといわれる。

- (1) 東京女子大学…英文学関係を中心とした蔵書
- (2) 北海道大学…農学関係を中心とした蔵書
- (3) 東京大学…植民政策関係を中心とした蔵書

これらのうち、農業経済を講じ、台湾における植民政策やその経験をふまえた大学教育に関わった新渡戸にとって、とりわけ(2)と(3)との間の親和性は強い。

ただし、近年の新渡戸研究を概観してみると、新渡戸の思想や活動がもった諸側面・諸要素の関連性が多く問題にされているように思われる。具体的には、植民政策講義等にあられる帝国主義的要素と国際連盟事務次長としての国際主義的要素、もしくは帝国主義的要素と、第一高等学校校長・東京女子大学学長等の立場からの講話にあらわれる教養主義的要素との関連性といったことがあげられ、上記の諸資料を総合的に活用していくことが求められている。こうした事情を念頭に置き、本調査は、たんに諸機関が行っているアーカイブ資料の整理・保存の方法や工夫のみならず、それら資料の活用がいかに可能かという視点をもって進めた。

①北海道大学大学文書館・同大学附属図書館「新渡戸稲造文庫」

二〇一五年一二月、北海道大学大学文書館および同大学附属図書館にて調査を行った。概要は以下の通りである。

(1)大学文書館は、北大の大学史に関わる資料を広く収集・整理・公開しているが、とくに札幌農学校時代の資料として、学生時代の新渡戸の受講ノートや、同校教授として行った新渡戸の講義を筆記した聴講生のノートなど、貴重な資料が多い。これらの資料のうち、新渡戸の資料を用いて、翻刻・刊行されたものに以下の書籍がある。

・高井宗宏編『ブルックス札幌農学校講義』北海道大学図書刊行会、二〇〇四年
 ・秋月俊幸編『書簡集からみた宮部金吾 ある植物学者の生涯』北海道大学出版会、二〇一〇年
 以上の情報をふまえ、同文書館で調査した資料には以下のものがある。

- ・新渡戸稲造「経済原理1」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「経済原理2」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「政治経済」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「政治経済2」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「農業史」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「農政学」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「日本経済学者」（高岡熊雄受講ノート）
- ・新渡戸稲造「農業総論」（湯地定彦受講ノート）
- ・新渡戸稲造「経済原理」（湯地定彦受講ノート）
- ・新渡戸稲造「農学総論」（西田藤次受講ノート）
- ・新渡戸稲造「農業史」（西田藤次受講ノート）

なお、大学文書館では、上記の資料等について教示を得たほか、新渡戸関連資料を所蔵するアーカイブとして前述の機関以外に、十和田市の新渡戸記念館について教示を得た。

(2)附属図書館所蔵の新渡戸稲造文庫の資料は、インターネット上に書目一覧を掲げており（前掲URL参照）、それによっていわば簡易目

録の公開としている。それを改めて通覧してみると、当初想定されていた、農学関係以外の書目も認められる。そこで、とくに本学新渡戸稲造記念文庫の書目との関連性が強いと思われる図書について閲覧・調査を行った（閲覧した資料の一覧は割愛）。

また、附属図書館のアーカイブを俯瞰してみると、新渡戸稲造だけでなく、新渡戸と同じく札幌農学校草創期の学生であった佐藤昌介や内村鑑三の蔵書が佐藤昌介文庫・内村鑑三文庫として所蔵されている。本学新渡戸稲造記念文庫における新渡戸の蔵書のなかでもカーライルの著書 *Sartor resartus* が重要といわれるが、佐藤文庫・内村文庫にもそれぞれ同じ本が所蔵されており、新渡戸におけるカーライル理解の意味を考える上でも、各々の学術的価値は高い。そこで、佐藤・内村の同書への書込みの調査を行った（佐藤のそれには書込みが認められない）。

②新渡戸記念館

二〇一六年二月、青森県十和田市の新渡戸記念館で調査を行った。

同館は、新渡戸稲造の父祖が推進した三本木原開拓の関連資料を中心とする広範かつ多様な資料を所蔵しているが、わけでも本研究プロジェクトの趣旨において、新渡戸稲造の手沢本（和書・約七〇〇〇点）が重要である。新渡戸記念館所蔵の図書類は、以下にその一覧が掲載されている。

・十和田市立新渡戸記念館編『新渡戸記念館 新渡戸稲造目録』第

一卷（洋装本目録その1）、一九六八年

・名倉英三郎編「十和田市立新渡戸記念館収蔵図書調査報告 和装本書名一覧」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』第五〇巻（一九八九年一月）

ただし、それぞれの一覧には誤記が見られ、新渡戸記念館の関係者によると記入漏れもあり、現在新しい目録の作成を進めているということである。

所蔵資料のなかには、『論語』の術語の英語訳を試みた跡、荻生徂徠・太宰春台などの近世文献を熟読していたことを示す跡、台湾勤務時代のポケットノートなどがある（閲覧した資料の詳細は割愛）。これらの多くは、先に調査した北海道大学所蔵の諸資料（とくに大学図書館所蔵の受講ノート類）と強い関連性をもつものであり、明らかに重要な資料である。このことから、本研究プロジェクトが当初から構想していた、新渡戸稲造関連の第一次資料をもつアーカイブ間の横断的なシステムや共同研究の可能性について、更に具体的に考えていく必要性が痛感される。

なお、新渡戸記念館の現在の運営状況等については、同館ホームページ（<http://nitobe.jp/>）を参照。

以上の調査をふまえつつ、今後ひきつづき、東京大学所蔵資料、そして本学新渡戸稲造記念文庫の本格的な調査を進め、「新渡戸図書」の全体像、その主要な書込みの意義、それらが新渡戸の思想においても

つ意味など、さらに立ち入った考察が必要である。また、ひきつづき各アーカイブの関係者と連絡をとりながら、今後これらの諸資料が更に活用されていく上で要請されるアーカイブの整備と連携のあり方について模索し、その可能性を生かしていくことが求められる。

VIII その他の事業・成果

本研究プロジェクトが当初計画した事業の進捗過程とその成果は以上述べた通りであるが、その他にも、計画していなかった新たな企画を、この期間中に展開した。主に丸山眞男の生誕一〇〇周年にあたる二〇一四年、没後二〇周年にあたる二〇一六年に、図書館や出版社等から持ち込まれた企画によって展開したものである。その成果は以下のものである。

◇二〇一四年度

(1) 平石氏が編集した『丸山眞男座談セレクション』（上・下、岩波現代文庫、二〇一四年）が刊行された。下巻には、平石氏の解題が付されている。同書は、「座談の能手」と呼ばれた丸山と同時代の知識人たちとの座談を身近に接することを可能にするものである。

(2) 二〇一四年一〇月三日～一二月三日、「丸山眞男生誕百年」企画を杉並区立西荻図書館と共同開催した。この期間、同館にて丸山文庫所蔵資料の複製を使用したパネル展示が開催された。この展示資料作

成作業には山辺氏が当たった。また、十一月一日には、平石氏が「丸山眞男の今日的意義について」、山辺氏が「丸山眞男文庫の事業」と題して記念講演を行った。

◇二〇一六年度

(1) 『丸山眞男回顧談』（上・下、二〇〇六年）を編集した松沢氏・植手通有氏に、平石氏が新たに編者として加わり、『定本 丸山眞男回顧談』（上・下、岩波現代文庫、二〇一六年）が刊行された。大幅に増やされた本文中の補注、年譜や関連地図などにより同書のもつ資料的価値が高められた。また下巻に付された平石氏の解説「人生への追記」は、丸山著述のなかで同書がもつ意味を明らかにした。さらに同書は、全体にわたって、丸山自身の回想と丸山文庫所蔵資料との関連性を示している。

(2) 二〇一六年一〇月～十二月、立命館大学加藤周一現代思想研究センターが、同大学平井嘉一郎記念図書館内の加藤周一文庫で、丸山文庫所蔵の丸山眞男宛加藤周一書簡の展示企画を開催、そのために必要資料を貸出した。

(3) 二〇一六年七月一日～一〇月一四日、「丸山眞男没後20周年記念 東女生が挑む 丸山眞男展」を東京女子大学図書館と共同開催した。展示はまず、丸山の主要著作とその翻訳、代表的な研究書などを並べ、それと共に丸山眞男文庫スタッフ作成の各書の紹介文（ポップ）を掲げた。また、二〇一四年度作成のパネル展示を、「丸山眞男の世

界」と題して新たに楽譜資料類のパネルを増補して掲げた。そのほか、丸山眞男手沢本（複製）、バーチャル書庫・草稿類デジタルアーカイブ専用PCを設置する等した。また、開催期間中、コラボ企画として図書館が「丸山眞男を読んで書評を書こう！」を開催。学生より書評が寄せられた。この展示企画の概要は、川口「丸山眞男が後世に託した知の「宝庫」への「挑戦」」（『東京女子大学学報』二〇一六年度第三号掲載）を参照。

(4) 二〇一七年一月三日～三十一日、紀伊國屋書店が「東京女子大学「丸山眞男研究プロジェクト」完結記念 丸山眞男ブックフェア」を開催、これに全面協力した。また、一月二日には、川口が「東京女子大学丸山眞男文庫の「現在」―バーチャル書庫と草稿類デジタルアーカイブの紹介―」と題してトークイベントを行った。

おわりに

本研究プロジェクト・テーマ2事業の進捗過程と成果は、以上の通りである。当初の計画からみて期待以上の成果をあげることができた。このような成果をあげることができたのは、参加研究者・スタッフによる尽力はもとより、関係各位の多大なご助力によるところが大きい。厚く御礼申し上げる。

ここに記した通り、二〇一六年度末までに完結し得なかった事業も幾つかある。しかし、刊行予定を超過している出版事業は、すでにお

およその見通しが立っており、そのほかの事業についても、今後調査・研究を継続していきたいと考えている。また、期間中に作成・公表される予定だった個別の研究論文も、本研究プロジェクトの多様かつ豊かな成果をふまえ、今後多く輩出されることであろう。

われわれが進めてきた以上の成果が、多くの研究者、学生、そのほか一般の人びとに広く活用されていくことを願ってやまない。